

○ 事業の概要

- 1 研究テーマ 地方創生の時代における社会教育行政の在り方
～「学び」と「活動」の循環を促すための方策について～
- 2 趣 旨 地域づくりや人づくりを推進する生涯学習・社会教育の中核を担う社会教育主事等の専門性を高めるとともに、関係する行政職員（生涯学習関連施設を含む）や社会教育委員等各種委員、社会教育団体関係者等が一堂に会して、地域の生涯学習・社会教育を推進する上での課題と、その解決に向けた方策について理解を図る。
- 3 主 催 北海道教育委員会／北海道立生涯学習推進センター
- 4 後 援 北海道社会教育主事会協議会
- 5 期 日 平成30年5月31日（木）～6月1日（金）
- 6 会 場 道民活動センタービル「かでる2・7」（かでるホールほか）
- 7 参加対象 市町村及び市町村教育委員会職員、各種審議会委員（社会教育委員、生涯学習審議会委員等）、社会教育関係団体職員、生涯学習関連施設職員（公民館主事、図書館司書、学芸員）等
- 8 参加状況

ブロック	道央			道南				道北			道東			道外	
	管内	空知	石狩	後志	胆振	日高	渡島	檜山	上川	留萌	宗谷	オホーツク	十勝		釧路
参加者数	25	61	15	9	12	10	11	26	8	5	23	19	13	19	1
ブロック人数	101			42				39			74			1	
合計	257														

9 プログラム

		9:30	10:00	11:20	11:45	13:00	17:00
1日目 5月31日 (木)	受付	Opening		説明	昼食 休憩	研究協議	
						社会教育基礎講座	
2日目 6月1日 (金)	研究協議		講演		Closing		
	社会教育基礎講座		※道民カレッジ連携講座				
		9:15	11:00	12:30			



(1) トークセッション「地域づくりの担い手育成に関する調査研究」について

コメンター：北海道社会教育主事会協議会会長 江 端 邦 仁 氏
：栗山町青少年育成会会長 原 田 優 司 氏
：NPO法人ezorock代表理事 草 野 竹 史 氏
司 会：北海道立生涯学習推進センター主幹 五十嵐 秀 介
説 明：北海道立生涯学習推進センター主査 尾 山 清 龍

【内 容】

生涯学習推進センターが平成29年度に行った「地域づくりの担い手育成に関する調査研究」について、3つの切り口から説明を行い、コメンターから意見をいただいた。



切り口 1

教育委員会の担い手育成事業と、地域づくりの活動をする団体数とがデータ上関連している。

原田氏：栗山町も担い手育成事業を実施しているが、最近では、担い手不足だけでなく、担い手づくり事業の参加者を確保するのが、課題となっている状態。

草野氏：マチの担い手育成事業に呼ばれることが多く、マチの若い人たちがとても元気な印象を受けること、団体間の横断的な動きが見られるようになってきた。

江端氏：「地方創生」に向け担い手育成事業を進めたいと考えるが、このデータは予算要求のバックデータとして使えると考える。

切り口 2

「地域の団体等」と「社会教育担当者」の関係について、社会教育担当者と地域住民・団体等との関係性が、担い手育成事業の成果に影響している。

草野氏：雑談が出来る関係が良いとの結果は興味深い。市町村から私へのオーダーも何を話すかざっくりしか言われず、実際は雑談をする中でマチのニーズを感じとっている。雑談の果たす役割は大きい。

江端氏：団体に近づきすぎて、団体の主体性がなくなった経験がある。ちょうど良い距離感が大切。

原田氏：団体と行政は程よい距離感があると主体的に動きやすい。

切り口 3

「つながりの工夫」と「主体的な地域の担い手の育成」について、どのようなつながりの工夫をすると担い手育成事業が軌道に乗るのか。

草野氏：事業の成功は「事前の努力8割、当日は2割」というくらい事前の努力が大切であり、過去の参加者が企画段階から参画するというつながり持つことで、事業の成功体験が次につながると考えられる。

江端氏：行政が作った団体は、行政依存の団体が多いが、新しく主体性を持って生まれた団体は活動の持続が見られる。このため、行政は、主体性をもたせるための工夫をしなくてはならない。

原田氏：Iターンの取組について説明があったが、栗山町でもIターンで来た方が、「よそ者視点」で見ってくれるので、他のメンバーには大変良い経験になった。



ま と め

コメンターから、社会教育以外でも盛んに行われている「担い手づくり」は、社会教育の根幹で得意分野であり、このような場こそ社会教育の出番と考え、力を発揮して欲しい。社会教育への期待はますます大きくなっているとのコメントがあった。

司会から、3名の方の意見は、午後からの分科会で是非生かして欲しい。調査結果については、市町村でも使って頂きたい。不明な点は、生涯学習推進センターに問い合わせで欲しいと、伝えられた。

(2) 説明「北海道における生涯学習・社会教育の推進のために」

説明：北海道立生涯学習推進センター主査 田中尚史

昨年度の研究成果を踏まえ、「学び」と「活動」の循環を促す行政からのアプローチについて研究をすすめることを説明した。また、これからの一年間の研究の流れとして、社会教育セミナーでは、分科会でグループ毎にアプローチを考え、参加者は自分のマチでアプローチを実践し、その後、ブロック研修で成果の交流を行い、地域生涯学習実践交流セミナーで、有効なアプローチについてまとめることを説明した。

(3) 社会教育基礎講座

講師：北海道立生涯学習推進センター主幹 五十嵐 秀介

〃 社会教育主事 中西 めぐみ

参加者同士、自己紹介を行い講義に入った。講義では、現在の社会の状況と社会教育行政担当者の役割を考え、果たすための方法について説明した。

特に現在の社会の状況として「地方創生」の意味を理解し、地域課題について、理解を深めた。

演習では、資料を基に地域の現状を調べ、地域課題を抽出し、課題解決のための事業の企画を行った。参加者は、グループで活発に意見を交換し、課題に取り組んでいた。



(4) 分科会

分科会	ファシリテーター
第1分科会「青年活動の促進」	生涯学習課生涯学習センターG主査 尾山清龍
第2分科会「高齢者の活動促進」	生涯学習課生涯学習センターG主査 田中尚史
第3分科会「家庭教育支援活動の促進」	生涯学習課社会教育・読書推進G主査 久保大輔
第4分科会 分割A 「地域学校協働活動の促進」	生涯学習課社会教育・読書推進G主査 長岡広之
第4分科会 分割B 「地域学校協働活動の促進」	義務教育課子ども地域支援G主査 石田貴宏

分科会では、目指す姿を設定し、4つのStepにより研究協議を行った。

Step 1 目指す姿になるための課題を洗い出す。

Step 2 課題に対するアプローチを考える。

Step 3 グループでおすすめのアプローチを考える。

Step 4 分科会内で発表する。

途中、他の分科会で出されている課題とアプローチを見学する時間を設けた。参加者は見学先では積極的に質問し、自分のグループの場所に来た人に対しては、熱心に説明する姿が見られた。

目指す姿

- 1 青年層が主体的なマチづくりを展開
- 2 高齢者が主体的なマチづくりを展開
- 3 家庭教育支援による、子どもたちの豊かな心と健やかな体の育成
- 4 地域学校協働活動による子どもたちの豊かな人間性、社会で生きる力の育成

<分科会成果物>

グループ毎におすすめのアプローチを作った。アプローチは「どのような状態の地域住民・団体」「どのようなアプローチ」をすると「どのようなようになる」という形式でまとめた。



(成果物の一部を抜粋)

団体の課題	アプローチ	団体の変容
行政の手伝いをしている状態の団体に	行政から提案をしないで、企画段階から参画してもらうと、	自主性・主体性を持ち活動するようになる。
人材育成事業が、人材育成につながっていない。	過去の参加者に人材育成事業を運営してもらうと、	学びと活動の循環がうまれる。
行政がやってくれると考えている受け身の高齢者に	マチの現状や課題を再認識してもらう場を設けると	問題意識の共有、当事者意識の醸成により、活動につながる。
趣味や特技に特化している高齢者団体に	活動アドバイザーを配置すると、	地域課題解決につながる活動を展開できる。
保健福祉部局に	担当者会議の実施働きかけると、	担当者レベルで互いの主催事業の把握し、課題を共有、連携事業の実施。
子どもの保護者に対し、事業を行っても狙いが伝わっておらず、参加者の固定化等形骸化が見られる。	家庭教育ナビゲーターなど、行政以外の人が、乳幼児法定健診、PTA総会などで事業をPRすると、	参加者の裾野が広がる、ナビゲーターの意識がさらに高まる、保護者と接する中でニーズの把握ができる。
地域人材を知らない学校の先生方に	校内研修の1コマをもらい、地域のことを学習する機会を提供すると、	先生方の理解が進み、地域と連携した教育活動を展開できる。
お互い理解不足の学校と、地域に	学校職員と地域住民に対するCSやその趣旨について説明会を行い、それぞれが希望する活動が見える化すると、	目指す子ども像が共有され、学校、地域それぞれの役割が明確になり、活動につながる。

(5) 講演「地域住民の主体的な活動を促す方策について」

講師：国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育調査官 二宮伸司氏

はじめに概念整理と原点帰帰として、「学習と教育の違い」、「3つの教育、フォーマルエデュケーション、インフォーマルエデュケーション、ノンフォーマルエデュケーション」「生涯学習と社会教育」について説明があった。次に社会教育主事の専門性について改めて確認され、特にプログラマーやコミュニティオーガナイザーの力が求められていることが紹介された。

次に政策の動向として、第3期教育振興基本計画の概要が紹介され、客観的な根拠を重視すること、教育投資の在り方、新時代の到来を見据えた次世代の教育の創造を留意する必要があると説明があった。

最後に氏が在籍する国社研は、レファレンス機能を有しており、必要な時には使って欲しいと話があった。

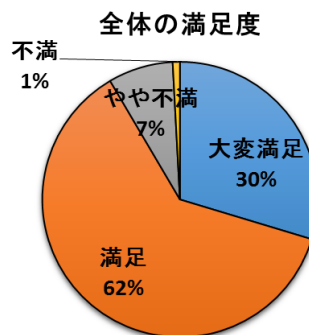


○ 事業の満足度

1 セミナー全体の満足度

満足度（大変満足・満足） **92%**

大変満足	30%
満足	62%
やや不満	7%
不満	1%

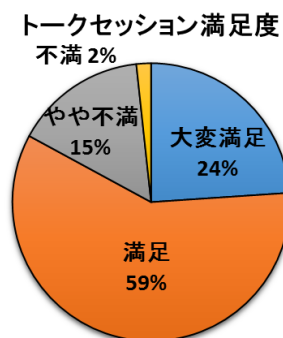


- テーマに沿った内容であり、持ち帰る材料が多かったです。
- 各地の社会教育関係者の方々とつながる良い機会となった。
- 他の市町村の方との情報交換と研究協議が有意義だった。
- 1日目にも講演を一本聴きたかった。
- 最初に行われたトークセッションと説明が、その後の分科会で参加者をスムーズに活動させていた。トークセッションとのつながりが生かせていた。
- 研究協議と（分科会）と1年間の研究サイクルのつながりを実感できる機会でした。
- 具体的な行動（アプローチ）につなげるための取組がたくさんあって良かった。
- ▲ 初日から2日目の流れは一貫性があまり感じられなかった。
- ▲ 物足りない
- ▲ 参加者に丸投げすぎる。テーマが大きすぎる。運営者側のごうまんさを感じる。もっと工夫が必要。
- ▲ 参加者にどうなって欲しいのか全く見えませんでした。

2 トークセッションの満足度

満足度（大変満足・満足） **83%**

大変満足	24%
満足	59%
やや不満	15%
不満	2%

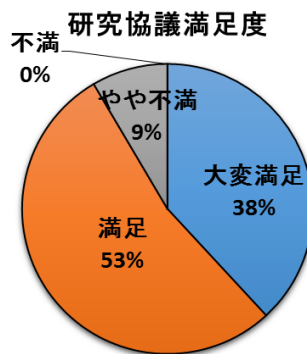


- 社会教育関係団体、NPO職員、行政職員の立場から議論をする形式は、初めてで、それぞれの立場における社会教育について学ぶことができた。
- 団体とつながるには、雑談が重要であると分かった。
- 活動を促すための団体・人との関わりかたを考えることができました。
- パネリストの具体的な実践をもっと聞きたいと思いました。
- これから必要とされる社教のチカラ、住民との関わり方のPointであることを再認識。
- 地元の青年団が低迷しているので、外部の刺激として ezorock の協力が欲しいと感じた。
- ▲ 質問の時間があっても良かった。
- ▲ 実践している人が来ているのにトークの内容が、調査結果ありきのつまらない話
- ▲ 午後のプログラムへの連続性という面からはどうだったのでしょうか。
- ▲ パネラーの話と調査結果を関連させるのは難しかったのでは。
- ▲ 調査結果の信頼性は？ 当たり前の結果なのでは？

3 研究協議・社会教育基礎講座の満足度

満足度（大変満足・満足） 91%

大変満足	38%
満足	53%
やや不満	9%
不満	0%

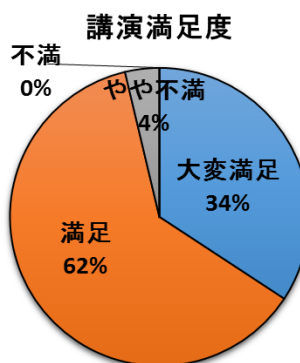


- 研究内容が難しくやりがいがあった。
- 普段関わることのない市町村の方と、地域課題を話し合えてとても勉強になった。
- 実践できるアプローチがあり、町に戻ったときに生かせる点が良い。
- 高齢者が主体的になるというキーワードに不安を感じたが、意外と方策が見つかることができた
- 他の分科会の様子も見ることで良かった。
- 社会教育についての講義をもう少し深く掘り下げて欲しかった。（基礎講座参加者）
- ▲ どの分科会も深く議論されておらず、当たり障りのない結論ばかりだった。
- ▲ “アプローチ”にこだわったためそれぞれの悩みや現状の交流があまりないまま”活動をやらされた”という感覚が残った。1日目午前からの流れがあまりよくないと感じた。
- ▲ （略）主催者道教委が全て講座形式でセミナーを運営する必要がある。そのスキルを道教委の面々はつけていく必要がある。その作業に怠惰を感じる。実践力である。
- ▲ 最初から成果物ありきのつくりには疑問、もう少し自由な発想でワークをして良いのでは

4 講演の満足度

満足度（大変満足・満足） 96%

大変満足	34%
満足	62%
やや不満	4%
不満	0%

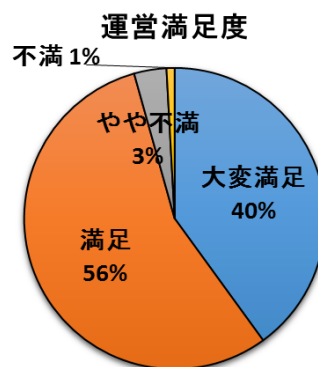


- 社会教育の本質を含めて、知識、政策の動向などが大変分かりやすかった。具体的な事例を示したり、調査結果の丁寧な分析がなされたりと大変参考になった。
- 貴重な資料がたくさんあり、今後の参考になりました。
- 社会教育士のメリットをもう少し、具体的に教えて欲しかった。
- 原点回帰と視点の確認が良かった。ボリュームありすぎて時間足りず、もう少し聞きたかった。
- これから社会教育主事として何を取り組めば良いのかあらためて確認することができたので。
- 鷹の目、虫の目、魚の目、とても分かりやすくなった。
- 参加者同士の話合いがあつて良かった。
- ▲ テーマに関する具体例が聞きたかった。
- ▲ いろいろ触れすぎてどこが大切かわかりにくかった。重点のみを厚く話してほしかった。
- ▲ この内容であれば分科会の前にやった方が良かったように思う。

5 運営の満足度

満足度（大変満足・満足） 96%

大変満足	40%
満足	56%
やや不満	3%
不満	1%



- 時間管理ができています。
- スムーズな流れで運営できていたと思います。
- 大変お疲れ様でした。
- プログラムなど毎年工夫があって良い。
- これまでと違うこうせいでしたが、とてもスムーズでコンパクトになり良かったです。ただ、1日目の分科会については時間が長く感じました。
- 参加者と共につくりあげようという姿勢は良かったと思います。
- 参加者を必ず出すように圧をかけるのではなく、自由にし、内容をもっと、もっと、もっと、よくしていく必要がある。
- ▲ セッション、講演時間をもう少し長くしてほしい。
- ▲ 質疑応答の時間があればと思います。設定できなければ、何かそれに代わるものを設定して欲しいです。

6 自由記述欄

- 協議のまとめをなくしたことが良かった。
- ライブ中継はいい取組だと思います。
- 研究協議はおもしろかったです。やはり他の市町村との交流はとても良い刺激になります。
- 1年間の流れとやることが明確になりました。
- 研究協議も実際に市町村に戻って取組やすい内容で大変、参考になりました。ありがとうございました。
- ブロック研、管内研との一貫的な学習ができるプログラム作りは効率的で良い。
- 本セミナーで学んだ内容を町に持ち帰り実際の事業に活かしていきたいです。
- 全体として、各分科会でどのような話がなされたかをまとめて聞ける場があると、なお良いと思った。社会教育主事と社会教育士の違いについて知りたい。
- 異なる場所で活躍されている話を伺ってまだまだ色々な取組があると気づきました。ありがとうございました。
- 社会教育について深い学びができ、トークセッションで3人の考え、それぞれの立場から意見などいろんな角度から見るができるということ。社会教育のおもしろさを学びました。
- ▲ セミナーの内容をブロック研に反映させる際の具体的な組み立てがわからない。ブロック研に何をどの程度、どのように反映させて欲しいのか明確にしていただかないと困ります。
- ▲ かゆいところに手が届くというよりは、そもそもかゆい所どこだっけ？とう感じです。現場に戻って試せるという部分にこだわっているせいもあるのか、思考は深まらず議論が上滑りしている感があったので残念でした。
- ▲ 現テーマの基での最終年ですが、課題解決の方策や最終的なゴールをどのあたりに置くのか見えなかった。1日半日程継続して欲しい。二日間の日程にある程度の一貫性が必要。研究協議については、ファシリテーターの進め方が分かりやすく、筋道が立てやすかった。

